KNEWS

倉敷中央病院広報誌

Take Free

#60

2024.4

公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構
倉敷中央病院

「チームで地域の脳卒中患者さんを救う」

いけだ　ひろゆき

香川県多度津町出身。香川大学医学部卒。京都大学脳神経外科、神戸市立医療センター中央市民病院などを経て2020年倉敷中央病院へ着任。専門領域は脳卒中の診断・治療、脳血管内治療。日本脳神経外科学会専門医、日本脳神経血管内治療学会専門医・指導医など。3人の子どもたちと過ごす時間が癒し。朝・夕の腕立て伏せと腹筋運動、野菜多めの愛妻弁当、7時間睡眠確保で、心身ともに万全の体制で患者さんに向き合う。

personality

「脳」の手術による救命に生涯をかける

学生時代から救急医療に興味と憧れを抱いていました。中でも、人間で一番重要な臓器である脳の手術で命を救う仕事にやりがいを感じ、生涯をかけると決めて脳神経外科医を目指しました。当時、脳神経血管内治療学会の専門医が大変少なく、「ならば」、と血管内手術を専門に決めました。

私の信条

「この先生に外来や手術を担当してもらってよかった」と感じていただけるよう、患者さんとご家族の話や想いをよく聞いて、望まれる最適な治療を一緒に考えていきます。脳神経外科の疾患では、手術をするべきかどうかや命の最終段階の判断を患者さんやご家族に求めることが多くあります。非常に判断が難しい場面では「私（の家族）だったら、どのような判断・治療をするだろう」と立場を置き換えて寄り添い、患者さんとご家族にとってより最適な治療が選択できるように努めています。

脳卒中治療の体制を整え、地域に安心を届けたい

脳卒中は誰がいつ、どこで、どのように発症するか分かりません。発症後、速やかに病院で適切な治療を受けられるよう、地域の皆さまに脳卒中について伝えたい。脳卒中の患者さんは非常に多いので、当院の治療体制をさらに充実させるべく、次世代の脳神経外科医の育成を進めます。目の前の患者さんの治療に全力を注ぎ最適な治療を行うのはもちろんですが、脳卒中で当院に運ばれた患者さんに等しく最適な治療が行えるよう、カンファレンスで治療の進め方を共有するなど治療の標準化を進めています。地域の皆さまが安心して過ごせること。それが、私の目標です。

Introducing a doctor

vol.9

脳神経外科・脳卒中科　部長

池田 宏之

▶ 脳血管カテーテル手術

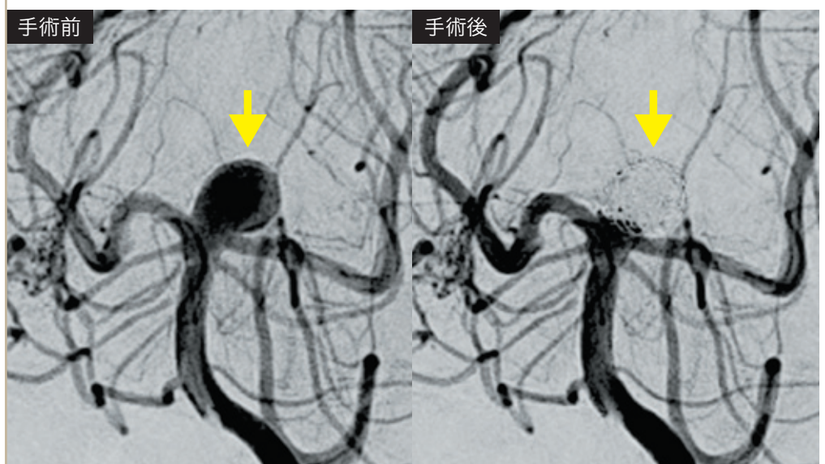
患者さんは70代女性。偶然発見された9mm大の比較的大きな脳動脈瘤の中を脳血管内手術によりコイルで充填した。術後の血管撮影検査で、脳動脈瘤の中への血流が遮断されたことを確認、脳動脈瘤の破裂予防につながった。

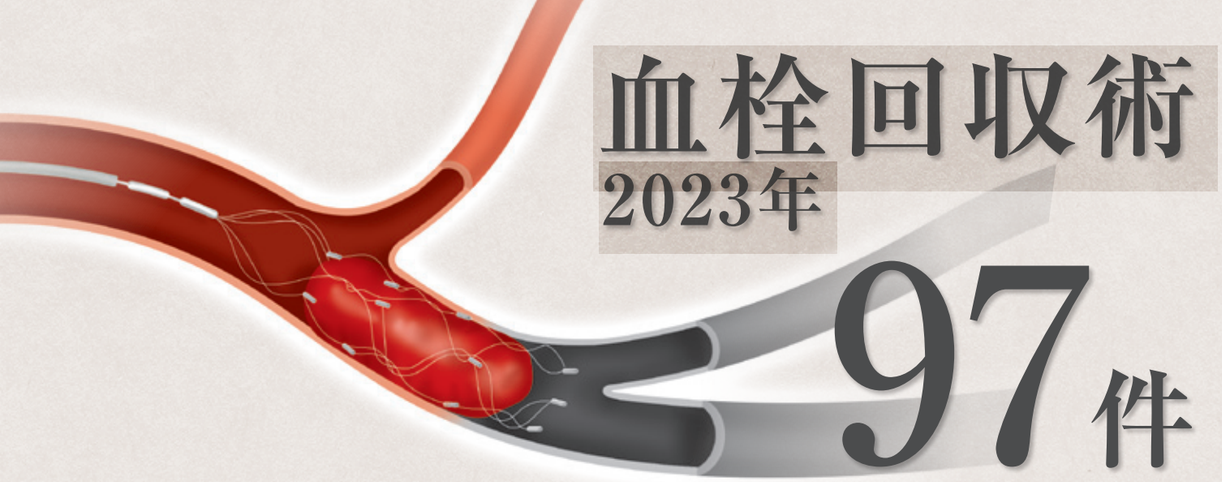
脳動脈瘤の位置や大きさなどは患者さんによってさまざま。治療対象となる平均的な脳動脈瘤の大きさは5-6mmで、手術には非常に繊細な操作が求められる。池田医師（写真右から2人目）は、1,500件以上の脳血管内手術に携わった経験と技術、考え方を若手医師に伝え、診療科全体のレベルアップと治療の標準化を進めている。その心には「100点を目指して0点（トラブル）になるより、80点を目指すべき」という恩師の言葉が常にある。この日も脳動脈瘤までのカテーテルの経路と、脳動脈瘤の位置、向き、大きさ、形状の画像所見を参考に治療戦略を検討した。患者さんに起こり得るトラブルをいち早く察知して積極的に伝えるとともに、目指す治療結果から逆算して「今どうすべきか」を提案し続ける。

disease
取り扱う主な疾患

脳動脈瘤 【のうどうみゃくりゅう】

脳動脈瘤は、脳血管にできるコブのことです。脳動脈瘤の破裂はくも膜下出血を引き起こし、脳の表面を覆うように出血が広がります。この場合、重篤な状態になることが多く、約半数の患者さんが死亡もしくは昏睡状態になります。脳動脈瘤の破裂は命にかかわる可能性が高いため、脳動脈瘤をクリップで挟みこむ開頭手術、もしくは脳動脈瘤の中をプラチナ製のコイルで詰める脳血管内手術を行います。これらの手術で脳動脈瘤の再破裂を防ぐことができ、元の生活に戻るまでに回復する可能性があります。破裂前に発見された脳動脈瘤に対しては、脳動脈瘤の大きさと患者さんの年齢に応じて、脳動脈瘤の破裂予防のために開頭手術もしくは脳血管内手術を行います（写真）。

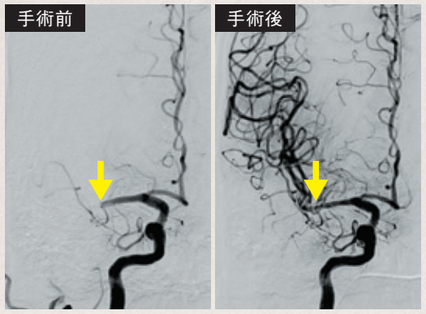




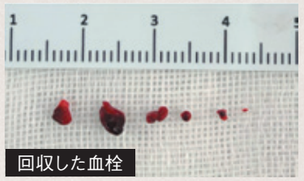
血栓回収術
2023年 97件

「脳塞栓症を引き起こした血栓を、血管内から回収して早期の血流回復を目指す」

脳卒中は、脳の血管に障害が起こることで発生する病気の総称で、脳梗塞、脳出血、くも膜下出血に分かれます。脳卒中の中で最も頻度が高い脳梗塞は、脳の血管が血栓で詰まる病気です。血管が詰まった先の血液の流れが悪くなると、脳の神経細胞が死んでしまいます。脳梗塞の急性期治療は、死にかかっている神経細胞を可能な限り救済することが目的です。脳血管が詰まることで、半身の手足が全く動かず意識状態が悪くなり、倒れたままの状態が続くと寝たきりや命に関わる状態になります。そのため、脳卒中の中でも発症してから病院受診するまでの時間が重要です。発症から4時間30分以内であれば血栓を溶かす薬剤を投与して、血栓で詰まった脳血管を再開通させます。太めの脳血管が詰まっている場合は、発症24時間以内であれば血栓回収術（脳血管内治療）で血栓を回収することもあります。血栓回収術は2015年に有効性が確立した医療で、当院ではハイブリッド手術室でこの治療を行っています。できるだけ早く救急搬送されて血栓回収術を受けることで、全く後遺症がない状態で社会復帰される方もおられます。



左図の患者さんは70代男性。左側の手足の麻痺と右側への眼球の変位が出現している状態で発見され、当院へ救急搬送されました。右側の中大脳動脈が詰まっており、13分間の血栓回収術で赤色血栓が回収されました。術後に脳梗塞による症状はほとんど消失して、リハビリテーションを行った後に自宅に退院されました。

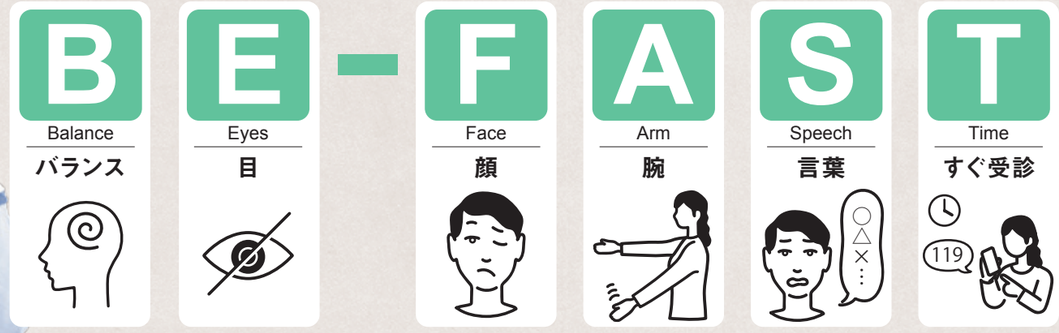


新型ハイブリッド手術室 2024年1月稼働開始

ハイブリッドとは、一般的には「異なる技術や機能が組み合わされたもの」という意味です。脳神経外科領域では、切って治す開頭手術と切らずに治す脳血管内手術は全く異なる手術になります。ハイブリッド手術室では、これらの異なる開頭手術と脳血管内手術を同時もしくは単独で行うことができます。すなわち、開頭手術を行う手術台に脳血管内手術を行う血管撮影装置を組み合わせた手術室になります。これらの手術の良いとこ取りができ、確実かつ迅速で安全性の高い脳神経外科手術に繋がる可能性があります。

脳神経外科領域における脳動脈瘤・脳動静脈奇形・動静脈瘻・脳腫瘍・くも膜下出血・脳出血・脳梗塞に対しては、疾患に応じて開頭手術もしくは脳血管内手術が選択されます。それぞれの手術の組み合わせが必要になることもあります。従来は、脳血管手術後に部屋を移動してから開頭手術、もしくは開頭手術後に血管撮影室に移動してから脳血管内手術を行っていました。ハイブリッド手術室では、開頭手術と脳血管内手術を同一手術室で同時もしくは迅速に続けて行うことができます。開頭手術と同時の脳血管内手術の必要性がなくても、開頭手術中に血管撮影装置を用いて脳血管撮影が行えます。また、血管撮影装置に附属している CT 撮影により、開頭手術中に病変位置と残存病変の確認が可能です。このように、ハイブリッド手術室はさまざまな疾患に対して安全性と確実性の向上に繋がる可能性があります。しかし、ハイブリッド手術室の手術台は、開頭手術と脳血管内手術の両方の要望を満たすために動きに制限があり、すべての疾患に使用されるわけではありません。

脳卒中の症状は「BE-FAST」



近くの人で脳卒中を疑ったときは、すぐに声をかけましょう。まずは笑ってもらい、顔のゆがみを確認します。次に腕が正しく上がるかどうかをチェックします。そして、うまくしゃべることができるかどうかを調べます。こうした動作がスムーズにできない場合、さらにバランスがとれない（歩行障害）、目の症状（片目が見えない、視野が半分欠ける、物が二重に見える）は、脳卒中かもしれません。その場合はすぐに119番に連絡してください。

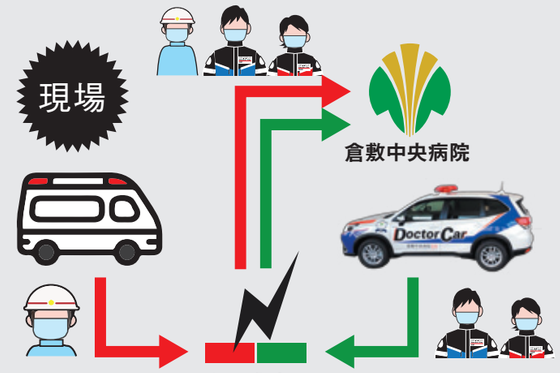
ドクターカークラウドファンディングでいただいたご厚志の残金を活用して

ラピッド・レスポンス・カー

を導入しました

【車種】スバル フォレスター Touring（5人乗り・4WD）
【装備】赤色灯・サイレン・無線装備

携行するバッグは救命救急センター内に常設。
出動要請がかかると車に積み込み出動します。



ドッキングポイント

高速道路の料金所前後、コンビニ駐車場、消防署など多数。安全にドッキングできる場所を事前に当院スタッフおよび消防職員で見学し、使用可能と判断したポイントのみ採用しています。

2022年7月27日から9月30日まで実施したドクターカークラウドファンディングでいただいたご厚志の残金を活用して「ラピッド・レスポンス・カー（Rapid Response Car、以下RRC）」を導入しました。集まったご寄付50,066,380円からドクターカー更新に16,000,000円を支出した残金は、当院の救命救急センターで使用する医療機器の購入費などに充てさせていただきます。活用の第一弾が、このRRCの導入です。

ヘリコプターで患者さんを搬送するドクターヘリの運用は日の出から日没まで。天候不良時も運航できません。三次救急医療機関のない遠隔地域では運行不能時は重症患者を直近二次救急医療機関へ搬送せざるを得ない場合があります。当院は2021年6月から、ドクターヘリの運行不能時、三次救急医療機関のない遠隔地域で緊急の重症者が発生した際に、事前に消防と取り決めたドッキングポイントまで当院からも医師・看護師が同乗した車を向かわせ、合流後に行政救急車内で治療しながら搬送する取り組みを行っています。

救急車タイプの車内（左がベンチシート）

以前は当院のドクターカーで医療スタッフが現地に向かっていましたが、車高が高いため揺れやすく、医療者は横向きのベンチシートに座って移動するため体に負担がかかっていました。合流後、医療者は行政救急車に移乗して搬送するためドクターカーで出動する必要はなく、小型で機動性に富み、揺れが少ない乗用車が望まれていました。

現在、交通事故などで外傷を負われた患者さんや、生命に異常をきたすような重症な患者さん（気道閉塞、重症呼吸不全、重症循環不全）を対象に、毎日12:30～22:00（日中はヘリが運航不能な悪天候時等）、出動要請に応じています。出動先は新見市、高梁市、笠岡市、井原市で、要請を受けてから5分以内の出動を目標としています。現場でのあらゆる処置を想定した必要物品をセットした専用カバンと簡易超音波機器（ポータブルエコー）を救命救急センターに常設し、出動時に携行します。

治療の遅れを防ぎたい、救命に努めたい。

ドクターカーに寄せていただいた想いとともに、患者さんの元へRRCが走ります。

倉敷中央病院からのお知らせ

創立100周年フィナーレイベント「キャンドルナイト」

1923年6月2日に創立した当院は、2023年に創立100周年を迎え、記念誌の発行やリレーコンサート、記念シンポジウムなど、当院の理念を引き継ぐイベントを開催してまいりました。そのフィナーレイベントとして3月27日、当院いずみの広場でキャンドルナイトを開催しました。

ペガサスキャンドル株式会社の協力のもと、会場には1,200個のキャンドルを並べました。メインデザインは100周年を迎えるにあたり職員への公募で決めたフレーズ「100年紡ぐ、想いがある」から「紡ぐ」と「100th」をキャンドルで見せる、というもの。職員、関係者が100年先に向けたメッセージを書き込んだ紙コップにキャンドルを入れ、多くの想いが一つのかたちになりました。

キャンドルの揺らぎは先の100年に向かう時間の流れを思わせ、「この先も地域とともにあり続ける」というメッセージを光で表現できた1時間でした。普段とは違う幻想的な雰囲気のいずみの広場で、職員やその家族、患者さんなど多くの方が、ひとときを過ごされました。

＼公式SNSで情報発信中／

市民公開講座の開催状況や疾患の解説記事、
当院で勤務する職員の紹介など、さまざまな
情報を公開していますので、ぜひご覧ください！

〒710-8602　岡山県倉敷市美和1-1-1　TEL.086-422-0210　FAX.086-421-3424　WEB.https://www.kchnet.or.jp